

【研究ノート】

『西鶴諸国はなし』研究史ノート(3)

——昭和20年以前の俳諧性の指摘をめぐって——

宮澤 照 恵

研究ノート

『西鶴諸国はなし』 研究史ノート (3)

——昭和20年以前の俳諧性の指摘をめぐって——

宮澤 照恵

目次

- 一、はじめに
- 二、山口剛
 - 1、『西鶴諸国はなし』に対する評価
 - 2、虚実の手法
- 3、俳諧性の諸相
 - ア、作品創作の推移
 - イ、翻案
 - ウ、配列
 - エ、各章内部の展開
- 4、意義と問題点
- 三、近藤忠義
 - 1、『西鶴諸国はなし』に対する評価
 - 2、俳諧性の諸相
 - ア、滑稽化
 - イ、近世化(当世化、或いは素材の脚色)
 - ウ、当代性(新風俗への関心)
 - エ、組み合わせという指摘——方法への気づき
 - 3、認識と問題点
- 四、おわりに

(一)

一、はじめに

先に「『西鶴諸国はなし』研究史ノート(1)」(以下、「ノート(1)」とする)において、昭和20年以前の『西鶴諸国はなし』研究の流れを通観し、作品評価をめぐる個々の研究を検証すると共に、現代に繋がる課題を考察した。次いで「『西鶴諸国はなし』研究史ノート(2)」(以下、「ノート(2)」とする)では、戦前の『西鶴諸国はなし』典拠研究を整理してオリジナリティの在処を明確にし、諸問題を検討した上で、論者の考える典拠論とは「作者の作為・たくらみを発見し、フィクション化の筋道を明らかにしようとする試論である」と定義づけた。

本稿は、戦前の『西鶴諸国はなし』研究における「俳諧性の指摘」を扱い、「ノート(1)・(2)」の補遺とするものである。すなわち、昭和40年代に至って、『西鶴諸国はなし』の俳諧性に焦点を当てることを通して西鶴の咄の独自性を探ろうとする動きが起るが、こうした試みがいつごろどのような形で芽生え、どのように発展していったのかを、明治以降の『西鶴諸国はなし』研究の中で検証し、その意義と限界を考えようとするものである。

キーワード…西鶴諸国はなし 俳諧性 山口剛 近藤忠義

とはいえ、『諸国はなし』の中に俳諧の方法が見られると認識し、「俳諧性」又は「俳諧的」といった表現を用いて積極的にその様相を分析する、或いは、文体や構想における俳諧的な特徴を抽出して作品論に発展させるという動きは、戦前には極めて少ない。

確かに、西鶴の浮世草子作品が現実の題材を扱っていること、及びそこに日常生活や当世風俗の描写が見られることは、早くから認識されていた。しかし、こうした認識が、談林俳諧の特質の一つである「現実性」や「当世化」という操作に結びついた形で論じられることは少なかつた⁴。その理由の一つには、明治20年代の西鶴の復活が文学者の手によるものであり、文学者主導の研究時期が続いたことが関係しよう。

こうした中で、「西鶴浮世草子に見られる俳諧性」への気づきが明確な形で論じられたのは、山口剛の『好色一代男』の成立⁵（『早稲田文学』大正11年3月）をはじめとする一連の論考である。『西鶴諸国はなし』論は、『西鶴名作集下』に掲載されている。一方、談林俳諧と浮世草子との内面的な交渉を「リアリズム」の側面から捉え、小説と俳諧双方に亘って人間性の発露を論じたのが近藤忠義である。

『西鶴』(昭和14年5月)には、『近年諸国咄』の翻刻と施注、作品解説が収められている。そこには、西鶴の俳諧的手法を近藤自身が十分に認知していた様子を見て取ることができる。

以下では、山口剛と近藤忠義の研究を取り上げて検証し、西鶴浮世草子の「俳諧性」に目を向けた彼らの指摘が、同時代の『西鶴諸国はなし』評価に変革をもたらす方法原理に成長することができなかった理由を考察していきたいと思う。なお、影響関係のメモを矢印によって付記し、引用は現代表記も併用する。

二、山口剛

1、『西鶴諸国はなし』に対する評価

はじめに、山口の『西鶴諸国はなし』に対する評価を確認しておく。『西鶴名作集下』解説その一では、志怪の書の流行に倣ったものとしながら、「教訓を避ける。博識を衒はない。更に不思議のこのみをお伝へない。むしろ怪談としては現実の色が濃い」などの点において、当時の志怪の書とは異なる西鶴の独自性を積極的に認めている。序の「都の嵯峨に四十一まで大振袖の女ありこれをおもふに人はばけもの世にない物はなし」を取り上げ、現実色が濃い奇談異聞の書とする。

同書解説その二では、テーマに即して問題を掘り下げ、作品評価を打ち出している。『諸艶大鑑』から『諸国はなし』への推移には、『諸艶大鑑』における『宇治拾遺』の利用が介在しているという新見(後述)を提示し、片岡良一が唱えた「作家的成長説」とは異なる立場を示した。一方作品の評価では、独吟二万三五〇〇句成就の疲労の中で書かれた題材主義の低調な説話作品とし、見聞の主の不在を欠陥と見る。この評価は、立場を異にしていたはずの片岡良一の低調作品説(大正15年3月。「ノート(1)」参照)を、さらに強調した形である。その一が概説にすぎず、その二が作品論である、という両者の性格の違いを考えても、「怪異性・教訓性に走らず現実色が強い奇談集」として本書を評価する一事、「軽く貧弱な低調作品」と断ずる一事では、その姿勢が大きく異なる。

変化をもたらした直接の要因は今詳らかではない。おそらく、同時代の人間主義賞賛に抗し、「浮世草子に見る俳諧性」という切り口によって新たな方向性を打ち出そうとしたことと無関係ではあるまい。山口の中では、『一代男』や『諸艶大鑑』といった小説としての結構

を持つ作品と、諸国奇談集をうたう『諸国はなし』とはジャンルを異にする作品と捉えられていたようであり、「大矢数の後の休養期間中に筆をとった軽いもの」という認識は、その二に一貫している。山口のこの評価以後、本書の「軽さ」は「貧弱・低調」と同義に扱われていくように思われる。

2、虚実の手法

山口の『西鶴諸国はなし』評価は見てきたとおりである。以下では「虚実」というタームに注目することにより、山口の考えた「俳諧性」の真相を探っておきたい。

まず、『好色一代男』に着目して、次のように述べる。

西鶴の俳諧、また彼が属する談林の俳諧の性質は、おのづから蕉風の閑寂と異なるものである。興は山野幽邃の境に寄せられずに、遊里弦歌の地に寓せられる。さながらに浮世草子の世界のものであった。その俳諧がわづかに表現の様式をかへさへすれば、もうとうに浮世草子であり、好色本であった。……(俳諧生活の)二十六年はあまりに永かった。彼の目も心もすべて俳諧的になりきった。新しい芸を浮世草子に託さうとしながらも、態度も手法も依然として昨の俳諧を脱しかぬるものがあつた。(『一代男論』)

山口は、西鶴浮世草子に何うことのできる俳諧的な要素を、俳諧師という作者の属性に帰結させる。「俳諧精神」が西鶴の浮世草子を貫いていることを認めた上で、それが西鶴浮世草子の長所でもあり短所でもあると言う。『一代男』に俳諧の方法を看取することは、今日では疑いの余地がない解事項である。しかし、西鶴に近代性を発見し、

(三)

そのリアリズムを顕彰しようとする研究状況の中では、極めて斬新な卓見であったと思われる。さらに山口は、西鶴の小説手法が意図的な方法であり俳諧に通ずるものであったとして、「虚と実」という表現を用いる。

西鶴は見聞の正しきをそのまま伝へると共に、精しからぬ筋には虚を以て補ふ。虚を實と見紛らす場合もあった。虚を虚としてをかしさに資する場合もあった。それがすべて俳諧の興趣であった。(前掲『西鶴名作集下』解説)

右に引用した「虚と実」のありようについては、「西鶴が当時の有識の読者を想定していた」という視座に立って次のように説明する。

多くの場合に、西鶴は個々の事象の描写に於いて、実を以てし、その配列に於いて虚を以てする。また、個々の事象に実を以て宛てながら、その一部に虚を残す。たとへば、事と処に実があれば、人に虚があり、人と事とに実があれば、処に虚のあるが如きである。もとの事実を悉く知らぬ者は、読んで悉く信じ、その中の一虚事を見出したものは、他の事実に対しても、軽い疑ひを有つ。信ずべきか、信ずべからざるか、その惑ひの中に、をかしさ面白さを味ふのであった。当時の有識の読者には、かういふ感を抱くものが多かったのであらう。(『虚実皮肉の間』¹⁰)

以上の山口剛による指摘は、二つの面から捉える必要がある。第一は、作品世界はあくまでフィクションである以上、事実そのものと作品世界とは異なることを認識し、読みの原点に立ち戻ることを主張

する側面である。当然至極な前提であるが、敢えて再認識を促さねばならない時代の必然があった。第二は、当代における有識の読者が行つたであろう作品享受のあり方に近づき、虚と実とを意図的に交えて創作している作家の虚構意識に分け入る必要性がある、と説く側面である。後代の研究指針となる姿勢を、ここに見ることができよう。

いずれも、「人間の真実を描くりアリスト西鶴」を顕彰する同時時代の思潮に傾斜した近代的作品理解、及び描かれた事柄を「事実」と捉え、その実証に向かう研究のあり方¹¹に対する反定立と解して誤るまい。次の記述などは、その間の事情を伺わせるに十分である。

時の隔たりは、西鶴の虚実を全く混淆させてしまった。今は多く、西鶴の筆を信じて、書かれたものを、みながらに実とのみおもはせる。作意を露はに見せなかつた町人物になると一段とさうである。西鶴が猶ゐたなれば今の読者にどんな苦笑を以て対するか。推測するに難くない。(前掲「虚実皮肉の間」)

「近代的人間像を冷静に観察し形象化した西鶴は、近代的人間である」という評価の筋道が定着していた時代であつて、西鶴の方法に注目し続けた山口の西鶴研究は、特筆すべきものであつた。

3、俳諧性の諸相

本稿のテーマである「俳諧性」に話を絞ろう。山口の言う「俳諧性」は、いくつかの要素を含む。私に四つのキーワードを取り上げ、その内容を以下に整理しておく。併せて、それぞれの意義と問題点にも触れておきたいと思う。

ア、作品創作の推移

第一は、前句との脈絡と距離(即離の関係)を保つ独吟の付合変化が、そのまま作品創作の推移に当てはまるとする点である。『西鶴諸国はなし』については、次のように説明される。

『諸艶大鑑』と『西鶴諸国はなし』とを比較すると、目録小見出し形式の近似性や、後者における怪異性の増加などが見られる。ここで両者の間に『宇治拾遺物語』を置いてみると、両者の関係の大きさと創作推移のありようがより鮮明になる。すなわち

①、『諸艶大鑑』の発端にすでに『宇治拾遺物語』の面影が見られること、及び巻三「朱雀の狐福」が『宇治拾遺』「利仁薯粥の事」の転合化と見られることが確認できる。

②、前作において『宇治拾遺物語』を利用した西鶴が、同じく『宇治拾遺』の形式を借りて諸国奇談集に手を染めたのが『西鶴諸国はなし』である

というのである。(前掲『西鶴名作集下』解説その二)

作品間の変化の要因を作家的成長に求めた片岡良一の研究¹²を考え併せると、山口が、いかに西鶴の方法に焦点を合わせた独自の読みを開拓していたかが明瞭になる。すなわち、作家の精神性とその成長とが作品に直接反映しているという前提を疑うことなく、創作方法はリアリズムの手法(事実に基づく形象化)に、作品の読みは人間主義的解釈に向かう研究方向に与せず、「先行文芸との関係を重視している点」、及び「虚構化の方法に着目している点」が画期的なのである(先行文芸との関係は、次に挙げる俳諧性その二「翻案」に繋がる要素である)。

但し、著作の推移と付合変化とを重ねるといふ山口の提示した論理は、著作順序と刊行順序との問題もあつて、必ずしも西鶴生前の全作品にわたる整合性を伴っているわけではない。本書に限ってみても、

『諸艶大鑑』と『西鶴諸国はなし』との間に先行文芸を置くことで、両者間の即離の関係を説明するものの、それぞれの成稿過程に関する顧慮や言及は見られない。今日的な視点からすれば、創作推移を取り上げるに当たっては、それぞれの作品の成稿過程という問題意識が不可欠であろう。

イ、翻案

第二は、西鶴が創作にあたって典拠を必要とし、その典拠を種種に弄び、俳諧化しているという捉え方である。要するに、一つの作品が本説を持つ、或いは和漢の古典と部分的関係を持つという立場である。原拠とその翻案方法に着目する行き方で、前述した虚実論と通底している。残念ながら具体的に論じた例は少ない。最も重要な作品が『一代男』であり、これが『源氏物語』の翻案であることを証する、さらには、続く『二代男』が「宇治十帖」と『宇治拾遺』の翻案であるとする(論の是非は、本稿では扱わない)。こうした論考によって、山口は西鶴の方法論に注目する道を拓いたと言える。

ところで、翻案とは作者自身の作意を梃子とした原作の再構築を意味する。山口が「その典拠を種種に弄び」と言うとき、そこに俳諧に通じる興と笑いとを念頭に置いていたことは、改めて述べるまでもないであろう。

その後、前期の作品が「必ず典拠を必要としている。その典拠を種種に弄ぶ、俳諧化する。その事がともすると中心となっていた。……典拠の俳諧化のうちに現代の事象を籠める(虚の中に実を籠める)」のに対し、後期の作品は、「典拠を離れて現代の事象に専らになる。……そうなるに却って実なき典拠の名をその作に負わせようとする(『永代蔵』と『大福新長者教』、『新可笑記』と『可笑記』など)」と

(五)

説明が加わる。さらには、通観して「典拠ある時期には、ひた隠しに隠し、ない時期には却って附会しようとする。例の俳諧の戯れである」として、作風の変化を視野に入れつつも俳諧精神は貫かれていると説く(前掲『西鶴名作集下』解説)。

『長者教』や『可笑記』などの誤りは措くとして、古典作品の翻案を挙げる山口の論考は、本説に拘りすぎるかに見える部分がある。その拘りによって、作意や興の方向性が限定される危惧が無いとは言えない。また、全体構想を論じる際の本説の問題に重心が置かれるが、本説と一つ一つの説話を問題にする際の本説の問題とは、さらに区別して考える必要がある。

↓「ノート(2)」でも触れたが、『西鶴諸国はなし』と『宇治拾遺物語』との関係は、その後の研究に大きな影響を与える。昭和40年代の説話や咄の方法への関心の高まりは、原題「大下馬」への解釈を深めた。すなわち、「宇治大納言隆国にならって、人々を下馬させて聞いた咄を書きとめた」意であるというそれまでの解釈から、「馬から下りてお聞きなさい」という咄の呼び込み(宗政五十緒)、「人々を下馬せしめるくらいおもしろい話」という自負の表明(江本裕)、という積極的な解釈に進み、作品の位置づけが大きく異なってきたのである。さらに谷協理史は、『宇治拾遺』が同時代作品として享受されていたことを示し、西鶴が対抗意識をもって(発想・方法・内容などを)逆転し相対化して超えようとする姿勢があったと説いた。ここに至って、『宇治拾遺物語』との位相関係は、依拠から競合へと完全に塗り替えられたといえよう。

ウ、配列

山口によって指摘された「俳諧性」の第三は、同一作品内における章や巻の配列に俳諧方式、すなわち変化となんらかの脈絡（一見繋がらぬようであり、どこか繋がる即離の関係）を認めようとする点である。『西鶴諸国はなし』目録における地名の配列と小見出しに、即離の俳諧精神が見られるとする。同一作品内の説話配列構成の問題を、俳諧手法と絡めて考えようとする試みである。

たとえば巻一を見る。奈良、京、江戸、紀州、伏見、箱根、播州の名が見える。この配列には地理的脈絡がない。そこに意味がある。意味はむしろ変化にある。しかも標目の下に一々その内容を要約する言葉が見える。知恵、不思議、義理、慈悲、音曲、長生、恨、こう読み続けると、もとより連絡がない。連絡のないのは、変化を求めたためであろう。しかし、二度三度読み返すと何となしに、連絡のありそうな気がする。……離れもせぬ、付きもせぬ関係によって配列せられている。即離の関係を重くみることに、俳諧の如きものはない。すなわち、俳諧の型が形をかえてここに現れたものとして見てよい。（前掲『西鶴名作集下』解説）

『西鶴諸国はなし』のような諸国奇談集の場合、各章の説話配列の問題は、編集意図の問題として避けて通ることができない。解き明かそうと試みて、山口の言う「即離の関係」という表現はマスターキーとなる。しかし、その先の道標がない。究めようとすれば、煩瑣ではあるが、各章に置かれた説話の多様性を腑分けし、次には配列基準について様々な仮説を立て、それぞれの妥当性を探るところから始める以外あるまい。この作業には、怪異性の有無、笑話性の有無、土地の

配列等々、様々な要素が絡んでこよう¹³。たとえば土地設定の問題一つ取っても、咄の内容と設定された土地とに必然的な繋がりがあるかどうかを一つ一つ確認した上でなければ、一括りにして扱うことは危険である。

また、「地名の配列と小見出しに即離の俳諧精神が見られる」という場合、「即離」の内実に捕らわれすぎて例外の可能性を排除する危険も伴う。山口は巻一の章配列を例示して説明する。しかし、巻一と他の巻との間で、配列に伴う緊張感が同じレベルであったとは考えにくい¹⁴。やはり、各巻すべての繋がりに法則性なり俳諧の呼吸なりが当てはまるのか、という問題意識は必要であろう。章配列に着目した山口の提言は、今なお本質に迫る論として貴重であるが、総論に留まる物足りなさが残る。

↓ 近年、咄ごとの脈絡を「人はげけもの」というキーワードによって解明しようとする試みが、森田雅也によってなされた（『西鶴諸国はなし』試論（下）『日本文芸研究』53の2）。

↓ 広嶋進は、『宇治拾遺物語』の説話配列と『西鶴諸国はなし』の配列との共通性を提言した（『西鶴諸国はなし』と説話集の方法』『近世文芸研究と評論』78）。

エ、各章内部の展開

「俳諧性」の第四は、各章が「俳諧的組織」を取っており、そのために却って一書全体の統一が害われているという見解である（テキストに即した具体的な説明はない）。自立した各章内部に変化や脈絡の即離性といった俳諧的な部分があり、そのために一書全体を貫く翻案論理や展開の筋道に破綻を来しているという指摘である。「安定した

全体構想が小説には不可欠であり、それは何らかの一貫性に裏打ちされて実現する」という文学観に依拠すれば、構想からの逸脱はマイナス要因とならざるを得ない。しかし、一方で「飛躍・省略・価値の解体」といった俳諧の精神構造並びに手法は、安定を拒む。この間の自家撞着を越えられなかった点が、山口西鶴の限界ではなかったか。各章の咄の自立性が保証されている『西鶴諸国はなし』については、踏み込んだ記述はない。ここでは、山口の考えた「俳諧性」の内実を示す一要素として、一文を引用するに留めておく。

かうまで俳諧的である西鶴は、その章その章においても俳諧的組織をとった。それがために、いかに組織の統一が害はれてしまったか。この俳諧的なことが、また長編の制作にも累を及ぼしたことはいふまでもない。「二代男」はいふも更なり、能の組織に倣った『五人女』にも、浄瑠璃の定型を追うた『暦』にも、病弊は明に見られる。(前掲『西鶴名作集下』解説)

4、意義と問題点

以上、四つの側面から山口剛の捉えた「俳諧性」を辿ってきた。山口説は、俳諧師西鶴と浮世草子作者西鶴とを結びつけて捉えようとした早い時期のものとして注目される。同時代の研究においては、俳諧と散文との交渉は「談林俳諧に現実社会を詠んだものが多い」という指摘や「心付けの流行を指摘して、西鶴にとって小説に着手することが不自然ではない」とする説に留まっていた。このことを考え併せる方向性の指示は貴重である。昭和40年代の研究方向を先取りしていると言えよう。「典拠とその転合化」・「俳諧精神」という本書の読解

(七)

に欠かせない視点を提示した功績は大きい。好色もの・町人もの・武家ものといった題材による分類ではなく、大きな視野に立って、俳諧性の度合いによる作品の捉え直しを提案している。

こうした視点は画期的なものではあるが、作品を一つの単位とみなし、作品ごとの変化を論じている点には問題もある。また、それぞれの作品に照らして十分な紙数を費やしているわけではない。これまで見てきたように、例示が少ないため具体的論証を欠いた総論になっているのである。現代から見ると、問題を単純化し、やや結論を急ぐ感が否めない。総じて山口が先鞭をつけた「俳諧性」は、大枠の提示であり精神のありようの指摘であった。問題関心そのものは、『二代男』を中心とする俳諧精神及び作品相互間の脈絡に向いており、俳諧精神を論じても彼自身の小説構想論の枠内に留まるものであった。この点が、『西鶴諸国はなし』への積極的な評価や創作方法の分析に向かわなかった直接の理由と考える。

三、近藤忠義

1、『西鶴諸国はなし』に対する評価

『西鶴』(前掲注8書)は、『近年諸国咄』が「自由なものの方をはぐくもうとする新しい町人の知的欲求に応えようとするもので、封建的な視野の狭さや固陋な見解に対する激しい抗議がある」と説く。序を取り上げて、「世間は広いのだ、こんな珍奇な話もあるものなのだ、視野を広げて広い世界を見よ」という主張を読み取り、新しい題材や主題の探求、合理主義思想・人間主義思想が見える、とする。

各話に沿って概略すれば、
修練による成果に人間の可能性や人間の力を信じる近世的な考え方

を読む(二の二・四の六)

女主人公の貞操観への注目(四の二)や武士への賛美(一の三)を読み取る

伝承の近世化(二の一・四の五・三の四)に新しい解放された人間意識を見る

というものである。近藤の評論は、それまでの『諸国はなし』低評価を一変させる「町人社会の解放の文芸」という歴史社会学派的な新しい視点を持った批評であった。

2、俳諧性の諸相

「近年諸国咄」¹⁵についてみれば、近藤自身は説話素材の「当世化」・「近世化」・「滑稽化」といった西鶴の方法を十分に認識していることが見て取れる。しかし奇妙なことに、これらの気づきは「人間復興、人間性への目覚め、封建社会への抵抗」といった理論にすべて吸収されていってしまう。個々の作品の読みとは別に、「当世のありのままの人間を描く」という発見とそれに対する賛美が大前提としてあり、そこにこそ西鶴文学の価値があるとするあまりに、個別の作品の読みによる発見が全て「人間主義的作品」、「人間復興の文学」という一つの方向へ収斂していく様が伺えるのである。

以下では、近藤の付した詳注に見られる俳諧性の指摘を取り上げ、内容を整理しておきたい。なお、同書研究篇も一部参照する。

ア、滑稽化

卷一「狐四天王」

狐狸妖怪の神秘や恐怖を主眼とはせずにすべて滑稽化している点に注意すべきである。

卷五「身を捨て油壺」

西鶴は『名残の友』卷五の五でも此の伝説(姥が火の伝承)を滑稽化して扱ってゐる。

近藤は、単なる滑稽化にも「固陋な見解への抗議」や「人間解放」を読み込む。その結果、読みの成果が理論に覆い隠されてしまうという現象がおきている。

イ、近世化(当世化、或いは素材の脚色)

卷一「雲中の腕押し」

義経の反歯で猿眼だった容貌描写が、伝承を踏まえたものであることを指摘。

『伽婢子』五の二や『狗張子』一の三などと比較してみて西鶴の近世的態度を理解されたい。

卷二「姿の飛び乗物」

妖女も当世めいている点に注意

「残る物とて金の鍋」

「鵝籠記」そのままを巧みに翻案。

卷三「紫女」

妖女や亡霊と契る話は支那の志怪の書に多いが、この話は『剪燈新話』の「牡丹燈記」や『伽婢子』中の諸篇と同巧である。ただ大いに近世化せられている点に注意を要する。

卷四「夢に京より戻る」

伝説の近世化を此處にも見ることが出来る。

右の五例では、中国種や伝説の典拠となる話をあげ、「近世化して

いる」趣旨の頭注を付している。意図するところは、実質的には転合化であり俗化・当世化であると言って誤るまい。談林俳諧の精神に基づき意図的な操作である。

ウ、当代性（新風俗への関心）

題材や描写に現実の色が濃いことは早くから指摘がある。近藤は、「リアリスト西鶴」という捉え方を前面に出す。近世化の項でも触れたところであるが、頭注に見る限り、近藤の指摘する当代性や現実意識傾向は、談林俳諧の精神と深く繋がっている。他の怪異小説類や諸国はなし群とは異なる、俳諧性の現れを認識していると思われる。

たとえば一の二「見せぬ所は女大工」について、土蜘蛛伝説と同巧であるが、世間は広く婦人の大工もあるといふ所に興味を感じているのである

という指摘がある。作者の当代への関心のありようや、取り上げる題材に当代性が色濃く見られることへの気づきである。

エ、組み合わせという指摘——方法への気づき

卷二「夢路の風車」

仙境譚と比事物とを合したもの。志那種である。

↓ 器と中身という捉え方は、『桃下源記』を首尾に、中に「蘇娥」をはじめ込んだという説（岡本勝『西鶴諸国ばなし』の方法）に発展。

卷二「神鳴の病中」

町人もの説話と奇談とをくつつけたもの

卷二「男地蔵」

(九)

町人もの説話と奇談とをくつつけたもの。
右の三例では、取り合わせによる創作という西鶴の方法に着目した読み方を提示している。

3、認識と問題点

近藤は、「大下馬ところどころ」¹⁷において、滑稽表現と現実主義と目を向けている。前掲の例示と一部重なる指摘もある。取り上げているのは、序の「閻魔王の巾着」と「浦島が火打ち箱」、卷一「雲中の腕押し」の義経主従の描写などにみる滑稽であり、卷二「姿の飛び乗り物」や、卷三「紫女」などの怪談の現実化である。

しかし、焦点は俳諧性そのものには当たっていない。まず、本書の構想は珍談奇談を蒐集したという擬態をみせてはいるが、囚われた知識や生活の解放に伴う未知の世界への関心や新しい経験への欲求の反映である

と読む。上述した滑稽表現（俳諧的手法）は、近世的写実主義の方法によるものとする。さらに怪異ものについては、

（紫女の）鬼女の姿態・言動をさえ、現実の浮世女房として描いている
と賞賛する。

つまり、一連の俳諧的操作は素材の近世化（現実化）への手段であつて、そこに単なる手段を超えた西鶴の思想的根柢を認めなければならぬという結論に至るのである。しかし、誇張や滑稽化・転合化といった俳諧的手法は、そもそも俳諧精神にこそ基づくもので、写実とは整合しないのではないだろうか。

ア、エの例示に戻ろう。『西鶴』本文篇を頭注に従って読む限り、先に抄出したように、近藤自身は説話素材の「当世化」・「近世化」・

「滑稽化」といった西鶴の操作を十分に認識していることが見て取れる。ところが、これらの気づきは同書の研究篇になると、すべて「人間復興、人間性への目覚め、封建社会への抵抗」といった理論に吸収されていってしまう。個々の作品の読みや方法への認識とは別に、「当世のありのままの人間を描いた作品であるという「リアリズム」を介した発見と賛美とが、大前提としてそこにはある。西鶴小説の価値の発見と称揚に性急なあまりに、個別の作品の読みによる発見が全て「人間主義的作品」、「人間復興の文学」という一つの方向へ収斂していくのである。近藤にとって「俳諧性」は、超現実素材から脱するための単なる手段を意味した。それ以上、西鶴の方法に拘わる意味は無かった。ここには、注釈作業と作品論との奇妙な乖離が見られる。時代の要請と訓子注疏の伝統的方法との乖離とが、そのまま投影しているようにさえ思われるのである。

↓ 近藤の『西鶴諸国はなし』に対する積極的な評価は、暉峻康隆『西鶴評論と研究上』に受け継がれる。

四、おわりに

「俳諧性」をめぐる戦前の研究史を紐解いた結果、山口剛と近藤忠義との対照的な『西鶴諸国はなし』論の展開を跡づけることとなった。前述したように、山口が先鞭をつけた俳諧性の追究は、作品の文学性をうたう同時代の研究方向とは一線を画す、作家の創作方法に目を向けたものであった。具体的には、創作に当たって本説があることを示したものであり、著作相互の脈絡、虚実を織り交ぜた描写や各話の配列などに俳諧精神が横溢していることの指摘であった。しかし、山

口が切り拓いた「創作方法への注目」は、戦前には前進が見られなかった。その要因としては、山口の小説構想論並びに本説論に限界があったことや推移説の十全な証明が不可能であったこともあろうが、背景にあった時代思潮——文学に人間の可能性や自由を発見するパラダイム——に抗えなかった面も大きかったように思われる。「俳諧性」は西鶴が個人的特性として身につけていたもので、創作にあたって何ら工夫し達成したものではないとすれば、時代を席捲した「元禄期の人間解放」という立場からの評価は得られなかったのも道理である。方法への注目という姿勢自体も、文学性の発見追究や文芸理論の構築という方向とは相容れなかった。期を一にして俳句革新の流れがあったことも周知のとおりで、散文における俳諧性追究はマイナス評価に繋がる恐れさえあった。

本書に冠せられた評価を軸にしてみると、皮肉なことに山口剛が低調作品論に、近藤が「人間主義的主張への賛美」によって積極的高評価に傾いたことを付記しておきたい。

「ノート(1)」において筋道を示したように、その後の研究の中で評価の見直しや変化をもたらしたものの実相は、「咄の方法」や「説話からの飛翔」であって、「俳諧性」ではなかった。「軽さ・自在性・スピード感・省略・脱線」といった俳諧の特性は、そのまま野間光辰の提唱した「咄の方法」に置き換えられていったのである¹⁸。

時を隔てて昭和40年代以降に、山口の提唱した西鶴の方法への注目が再生する。以降、現代に及ぶ散文における「俳諧性」の追及には、「西鶴に目論見があつてそれが隠された主題となっていること」、及び「作品形象化の過程には一見気づかれない形で俳諧的手法が用いられていること」が前提になっているように見受けられる。すなわち、西鶴の目論見や作意を探り筋道をつけて解き明かすことが、作品に仕

掛けられた謎を解くこと(俳諧性の解明)に繋がり、作品の本質に迫ることを可能にするというのである。その意味において、『西鶴諸国はなし』には俳諧性が凝縮されていることを、改めて主張しておきたいと思う。

注

- 1 宮澤 照恵「『西鶴諸国はなし』研究史ノート(1)」『北星学園大学文学部 北星論集』47 平成19年3月
- 2 宮澤 照恵「『西鶴諸国はなし』研究史ノート(2)」『北星学園大学文学部 北星論集』49 平成20年3月
- 3 宮澤 照恵「西鶴諸国はなし」(『西鶴と浮世草子研究』1 平成18年笠間書院) 参照。昭和40年代の井上敏幸・宗政五十緒をはじめ、現在に至るまでこの試みは続いている。
- 4 『西鶴諸国はなし』に限定した時、現実性の指摘が、咄本や仮名草子の諸国はなし群といった、西鶴が本書の執筆に当たって当然意識していた筈のジャンル意識を十分踏まえた上でおこなわれていたものかどうかについても、疑問が残る。たとえば、笑いや現実性は、咄本の原点ともいべきものである。咄本につきものの日常生活や当世風俗の描写(当代性や写実性)と本書の持つ当代性や写実性とを比較検討して、そこに西鶴の独自性を発見したのかどうか、さらにはそこに談林俳諧の影響を色濃く感得したかどうかは、不分明である。
- 5 谷協理史は、山口西鶴の研究史上の独自性と孤立性とに触れ、山口説の復権を呼びかけた。山口の立場の特異性に対し積極的評価を下しているが、山口西鶴自体の分析には向かわず、論文間の齟齬や限界にはほとんど言及していない。谷協理は、「(山口剛は)深刻に、生真面目に(西鶴を)読もうとする姿勢を意図的に斥けようとしているがごときなのである。」として、「をかしさ面白さ」を生む西鶴の作意に注目する読みの提示に主眼を置いている(『山口西鶴の復権——読みの姿勢をめぐって』『西鶴 研究と批評』所収)。
- 6 日本名著全集刊行会 昭和4年10月
- 7 主な論考は、『近藤忠義日本文学論』(一)〜(三) (新日本出版社)に集大成されている。
- 8 日本古典読本9 日本評論社。「ノート(1)」参照。
- 9 前掲注6書135ページ
- 10 『西鶴・成美・一茶』(昭和6年10月 武蔵野書院)
- 11 「ノート(1)」参照。
- 12 「ノート(1)」参照。
- 13 宮澤 照恵「『西鶴諸国はなし』総覧——成立論・方法論への手掛かりとして」(『北星学園大学文学部 北星論集』35 平成10年3月) 参照。
- 14 たとえば、一書の構造を各巻の構成だけから見た場合、巻五と巻一の間の分量や体裁の差は明らかである(宮澤照恵「『西鶴諸国はなし』成立試論——書誌形態を通して」『国語国文研究』115 平成12年3月参照)。
- 15 前掲注8書
- 16 論者は、女大工そのものについては、西鶴の創作であると考えている

(宮澤 照恵「『西鶴諸国はなし』咄の創作」『北星学園大学文学部 北星論集』44 平成17年9月参照)。

17 『国文学誌要』3の2 昭和10年11月

18 野間光辰「はなしの方法」によって、現実的な話材や「軽さ・自在性・スピード感・省略」といった文体に見られる話芸性に照明が当てられ、西鶴が咄の名手であったこと(『見聞談叢』の記事)がその裏づけとして提示された。近藤忠義のいう「社会的意欲」・「近世町人の知的要求」を「はなしの要求と好奇心」に摩り替えてみせたのである。

その後、延宝期の咄の流行説(江本裕)や『西鶴諸国はなし』が「咄の本」としても享受されていたという傍証(『書籍目録』)が加わることで、西鶴の「はなしの方法」は定着し、昭和50年には本書を「咄台本の集成」とみる説(宗政五十緒)が出るに及んだ。